

---

# 姉サンに発情中part2

お空

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

姉サンに発情中 part2

### 【Zコード】

N7322X

### 【作者名】

お空

### 【あらすじ】

波乱万丈な人生を送っていたせいか歳の離れた別居している姉・美代のことをよく知らない弟・慧斗。しかし母親が末期のガンだということを知り、しばらく実家に居ることになつた姉。ところが慧斗は実の姉に心を奪われてしまつ。幸せの絶頂かと思いきや、姉は元カレの元へ帰つてしまい…。

## 変わらない心（前書き）

part2で「jazz」します。

前作を知らないでも全然大丈夫だと思います。

## 変わらない心

頭では、分かつていた。

実の姉に恋するなんて客観的におかしいと締め付けられる心では十分に理解していたはずなのに、好きになつてはいけないと初めて思つたのに、この気持ちはもう誰にも止められない。

僕は完全に惚れていた。

あつと誰がどう見ても気付くと思う。（鈍感すぎる人には無理だろう）。

次女の姉さんはこの世にもういない。

母も、つい最近帰らぬ人となってしまった。

そして君、長女の美代。

君がいなくなつたこの部屋は何かが消えてしまつたようだ。

僕、慧斗は長女の美代に恋をしている。

ただ、それだけである。

## 変わらない心2

僕は珍しく机に向かつて恋愛小説を読んでいた。

中2男子が恋愛小説を買って読む、ということは気持ち悪いと言わ  
れるのは承知している。

読み終わったとき、僕はやはり姉さんを思い出す。

その話は愛しあつていたカツプルの女のコが病死してしまい、男の  
コは永遠に一緒だよと思って胸にタトゥーを刻む…という流れだつ  
た。（説明になつていなかも知れないが感動したというのは事実  
だ）。

どうして人はこんなにも簡単に心を奪われるのだろう。  
どうして人は今がずっと続くと思っているのだろう？

その答えは僕自身で見つけなきやとかカツコイイ事を思つけど實際  
は解けない気がした。

ピーンポーン、という音が誰もいない家に響いた。

一体誰なんだろう。2人暮らし（僕と父さん）のこんな寂しい家に  
お客さんは考えがたい。

僕は誰が来たのか薄々分かつた。

「よつ」

加織だった。

僕のことが好きだというのはこの前の夜に十分理解できたけど、ま  
さかここまで本気だとは思つていなかつた。幼馴染ということもあ

り、遠慮せずSEXできる僕だから「好き」という意味かとも少々思っていたからだ。（ちなみに、記念すべき童貞卒業のお相手は加織である）。

「何だよ」

「へへ、夕飯作ろうか？」

僕は迷惑そうに言つたつもりだったが加織には通用していなかつたみたいだ。

「作れんのかよ」

「失礼すぎ。肉じゃが作つてあげる」

「へー、ありがたい」

そう言つて加織はつかつか入つていった。

昔と何も変わつていない、成長しようと思つたけど肉じゃがを作つてくれるらしい（本心、ちょっと失敗しそうだ）ので黙つておいた。

加織が姉さんだったら…と、思つてしまひ。

## 加織

「あら、材料結構あるね」「加織が冷蔵庫を開けながら言った。

「まあ」

適当に返事をしておいた。

「慧斗は料理作るの?」

加織が僕の名前を呼び捨てる。別に構わないが、姉さんは“慧ちゃん”とか言つから、ちょっと違和感を感じた。

同じ年だからいいか、と思い直して

「普通だよ。ほんとに普通」と答えた。

「あつそー、ですか」

台所でエプロンを縛る加織を僕はリビングのソファから見ていた。キッチンとリビングへの境目がほぼない（カウンターがあるけど）ので、キッチンの様子がリビングから見れるのだ。

「何よ?」

加織が僕の視線に気づいたらしい。

「別に」

心の中では女らしくなったな、と思つていた。

「あ、裸エプロンが良かつた?」

ニツと笑つたキッチンにいる幼馴染が言つ。

「…あのねえ」

僕はそう言つたが、裸エプロンも悪くないと思つてしまつ。それを悟つたのか、加織がこう言つた。僕はお茶を吹きだしそうになる。

「夕飯終わつたらさ、久しぶりにやひつよ

相変わらず、なんちゅー女だ。

## 加織（後書き）

久しぶりの投稿です^\_^ ;

ぼくは先程の、加織が言つた大胆な一言に「うん」と返した。  
傷つけたくなかった。

その後、加織は淡々と肉じゃがを作る。その間も、会話は弾んだ。  
他の女の子に比べて、気を遣わなくて良かつたし、何より加織とい  
るのは楽しかった。

テーブルに、料理が並べられる。  
母さんが亡くなつて、姉さんが行つてしまつて、 いつも機会が激  
減してしまつたからか、  
照れくさく感じた。

「食べよっか」

加織がエプロンを外した。

「うん」

じゃがいもを食べてみた。（もちろんおそるおそる口に運ぶ）  
文句なしに、美味しい。

「どう？ 美味しい？」

頬杖をつく加織の目が輝いた。

「うまい！」

「良かった」

笑つた目の前にいる少女が、また大人らしく感じられた。  
まだ中学生だというのに。クラスの女子とか比べ物にならないぐら  
いの大人びた雰囲気に  
ちょっとだけドキッとする。

「あれ、お父さんは？」

加織が聞いた。

「…深夜に帰つてくる」  
僕があまりにも暗い顔をしたのか、それ以上は何も聞いてこなかつた。

\*

夕食の20分後には、ベットの上にいた。

加織はニコニコ笑つてゐる。

そんなに嬉しいのだろうか。

「ねえ

「何?

「舐めていい?

えつ、と声に出しまつ。さすがに驚いた。

「ダメなの?」

首をかしげる加織が不満そうな顔をする。

「逆に…いいの?」

実に僕は情けない。

加織がふつと笑う。

「良いよ

\*

加織の体に挿入した時は、本当に気持ち良かつた。

姉さんが好きなのは本当だけど、体は反応してしまつ。

：本能。

最高の言い訳である。

そう言つてしまえば「浮氣」も許される気がしてきたが、女の子側からすればその逆なのかな?  
と僕は考えてみた。

それ以上は考へないとにした。

これが「罪」なよつに感じてしまつからだ。

\*

「今日はありがと。またね」

加織が玄関先で靴を履きながら言った。

どんな表情をしているのかは、僕からは見えない。

「此方こそ」

まさにその通り。

「家近いし、送らなくとも良いから」

「ゴメン」

加織は立ち上がり、振り向いた。

「謝んなくても良いよ。慧斗がウチのこと家まで送りつとしてる事はバレバレなんだから」

どうやら見抜かれていたらしい。

衝動、か。

性交が本能だのどうの言ひ僕のもう一つの言い訳。

僕は加織を抱きしめ、キスをしていた。

いや、していたというよりも、僕からキスをした。

「んつ……」

体を離すと、加織の顔は少し赤くなっていた。

さつきはあれだけのことしたのに、女ってつくづく分からない生き物だ。

「あ、ごめん。嫌だつた?」

そう言ったのは僕だ。

「ううんー違ひの

頬に手をあてて否定した。そりゃあ、そりだろ。

加織は続ける。

「慧斗からキスしてくれたのは初めてで、嬉しくて…」

「そつか、嬉しいよ」

告白を受けていたのは前の話だったが、今も変わりはないらしい。

「じゃあ、ね！」

嬉しそうに加織は帰つて行つた。

やはり幼馴染の彼氏にはなれないな、と思つてしまつた。

まさかこの後、死ぬほど嬉しくて、死ぬほど後悔に溢れる出来事が訪れるなど、気配すら感じていなかつた。

## 加織2（後書き）

性交シーンはカットしました。すいません；

僕はドアを閉めようとした。

誰かが帰った後、ドアを開けっぱなしにする馬鹿はいない。

閉めようとした瞬間、僕は顔をあげた。

綺麗な、僕好みの女性が立っていた。

言葉にできない感情が僕の全身を走っていく。

体中が熱くなってきて、心の中は愛しさで溢れる。

おまけに、目も熱くなってきて、涙が出そうになつたけどなんとか  
こらえた。

姉さん。

確かに田の前にいるのは僕の世界で一番に大切な美代だった。

「ごめん…」

第一声は姉さんの「ごめん」だった。

その一言を聞いて、僕は先程のことを悔やんだ。

加織が出ていくところを見たんだと直感で感じた。

「え？」

とぼけてみる。

「…ううん。なんでもない。久しぶりだね、覚えてる？」

「忘れるわけないよ」

姉さんに惚れたあの日から、毎日想つ日々だった。

「ははっ、嬉しいな」

小さい花のような頬笑みを見せたけど、すぐ消えた。

「なんかあつた？」

僕は問いかける。

嬉しさと、後悔と、感動に不安がよぎる。

「言こにくいけど…」

「うん」

覚悟を決めた。

「泊めて！」

確かに姉さんはそう言つた。

\*

僕らはリビングでお茶をしていた。姉さんに再会したら、言いたい事を全部言おうと思った。

でもいざとなるとなかなか出てこない。それよりも姉さんは落ちこんでいるようだった。

「泊めて」と言われたが、元々実家なのでそんなに言こにくい事でもないんじやないか？と疑問を抱いたけど、そんな小事のことより姉さんの気持ちを大事にしようと思つ。

「「めんね」

姉さんがココアを飲みながら、僕に謝る。大人だけどコーヒーよりもココアの方が好きだと  
「うところがまた可愛い。」

「別にいいよ。帰つて来てくれて嬉しいし」

キッチンからお菓子持つてきて優しく言つた。

しかし姉さんはまたしょんぼりした。

「お父さんは？」

「ココアをテーブルにおいて、明るい顔をつくりていた。

「まあ」

次は僕が暗くなつた気がする。

「やつか

悟つたようになつむいた。

「最近、家にいることが少なくなつたんだ。…父さん」

それは事実だつた。今まで家でテレビを見ながらお酒を飲んでいたが、今は毎日のように飲み歩いているようで、なかなか帰つてこない。帰つて来ても僕は外出していると思つ。

仕事の方は順調のよつて思えたが、リストラされていてもおかしくないぐらいだ。

「もしかしてそれつて、私が出て行つて…母さんが亡くなつたから？」

口調が激しくなつた姉さんの顔は不安で満ちあふれていた。

「違うよ

僕は優しく言つた。

ココアを置いて、ソファに座つてゐる姉さんの隣に近づく。

「でも！いつも自分ばかりだし…、家にも全然帰らなかつた。あたしは勘当みたいになつちゃつて、加代子だつていなくなつちやつたし、高校時代なんか…」

今にも泣きそうな姉を見て、抱きしめたくなる。

「大丈夫」

そう言って、姉さんの隣に座った。

少し見ないうちにまた女性らしくなったし、何か悲しいものを背負つているような雰囲気だった。

「慧ちゃん…」

姉さんが僕に抱きついた。

さつきまで加織がいたこの部屋も、全然違う風景に感じた。正直、加織のことは頭から離れていた。

嬉しいという感情より、ただこの女性を守りたい一心で、抱きしめた。

「エշよ！」

15分が経つただろうか。だいぶん落ち着いたようだ。体をはなすと、姉さんは「」と言つた。

「どうやら僕の周りの女の子は衝撃的発言が多いようだ。

「デジタル時計に一瞬、田をやる。

「良かつたよ?」

僕と姉さんはベットで戻る。

「そう」

さつき見た時刻を忘れてしまった。それだけ姉さんの笑顔は威力がある。

何もかも忘れて、幸せにさせられる。

「誰か、練習相手でもいるのかな

僕を見つめて言うので、再び田をそらす。といつても、姉さんは裸なのでそこでまた田線をそらす。

「まさか」

ギクッとした。加織の裸体が思い浮かんだからだ。

「嘘つかなくていいよ。見ちゃったからさ

「えつ?」

「加織ちゃん」

後悔が襲つた。あのとき、加織を追い出せばよかった。しかし、体は求めてしまう。

こんなにも姉さんの事が好きなのに。

「誘われただけだから」

焦る心を隠し、冷静に応える。

「良いんだよ、別に」

姉さんはニコッと笑つたが、その瞳の奥は悲しそうだった。

「俺は美代だけだよ」

そう言つて、抱きしめた。自分でもビックリするくらい熱くて力強い声が出た。

ありがとう、と言つて姉さんも強く抱きしめてきた。  
その意味がどういう意味なのか分からぬ。

弟だから？

男性から告白されたから？

年下から告白されたから？

分からぬ。

しかし、加織がこの家から出でていく所を姉さんが見たといつ事實と記憶は消えない。

女の直感とは鋭いもので、加織の表情から僕達がしたことを察知したのだろう。

父さんはまだ帰つてこない。

もしこの状況で帰つてきただつていい。

姉さんを離したくない。

「もう一回つ…」

そう言つたのは、姉さんだった。

\*

行為を終え、僕は眠つた。人は性交の後、何故眠くなるのだらう。

先に眠つたのは姉さんだった。

当然、寝顔をお目にのけるわけだ。

世界で一番好きだと思った。

寝息をたて、可愛く眠っている姉さんを見て、切なくなる気持ちもあり、結ばれない運命にあることをもどかしく思つたりもした。こつこつ事は出来るのに、何故気持ちは重ならないんだ。

毎日隣に居る、こつこつとも難しい状況で、何故姉さんが隣で寝ているんだろう。

僕は考えるのをやめた。

寝ている姉さんの頬にキスをしたのは言つまでもない。

\*

「おはよう」

朝起きると、姉さんが台所で田玉焼きを作つていた。しかしもエプロンを着用していた。これ以上の幸せがあるのだろうか。

「おはよう、どうしたの？」

僕はソファに座つた。

「見て分かんない？朝ごはん作つてるの」

昨夜までは加織がキツチンにいたのが、不思議に思えてくる。

「へえ、サンキュー」

純粹に嬉しかつた。こんな平日に姉さんがいることも。

「昨日凄かつたね」

お決まりの言葉を姉さんが口にした。決まり文句も、実際に言われてみると照れるものだ。

「やうかな

「照れてる?」

笑い声が聞こえた。僕はうつせ、と小さく言こながらも顔は赤かつたと思づ。

「あ、焦げちゃう」

理科のヤマダ先生、口に可憐に生物がこまかけど、びりしましょうか。

僕はあえてスルーした（もう言葉に出来る単語が思いつかない。可愛すぎでどれが適当が分からぬ。どうやら僕は国語力が乏しいようだ）。

「はーっ!..」

明るい声で、僕の前に差し出す。

「美味そつ。さつすが」

「でしょ、でしょ!..」

さつそく席につこうとして、一口食べてみた。

美味しい。

「美味しい。シェフになれるんじやない?」

「やつぱり、思った」

笑顔の姉さんが一番ステキである。

「ねえ

「ん?」

姉さんは僕の顔にずいっと近づいてまたしても衝撃的すぎる言葉を

言い放つ。

「学校行く前に、一発いつぢやいつ？」

数学の時間、僕はポーツと黒板を見つめていた。結局、朝のお誘いは断つた。断りたくはなかった。むしろ、大歓迎だったのだけれど、遅刻という現実が迫ってきたのだった。遅刻はまずい。

僕の学校には「1人が遅刻したら、クラス全員放課後掃除」などと鬼的なルールが存在するからだ。

もし遅刻してしまえば、クラスメートに迷惑がかかるのは当然のこと、また僕にしても放課後にお掃除をするのは「ゴメンだ。

家に帰ると、姉さんが待っているだろう。

それでまた、責められるに違いない。

僕は遅刻せずに済んだ。今日も平和な1日を送れそうだ。

先生が何やら必死で問題を説明しているがそんなものは耳にも入らず、姉さんのことだけを考えていた。顔は緩まない様に気を付けているが、どうなっているかは分からぬ。

しかし途中、僕は現実に戻った。  
体が反応してしまうからだ。

僕はかなり慌てて、授業に参加した。急いでノートをとつた。

\*

昼休みはやつてきた。

「早川くん、今日ギリギリだったね。珍しい」

席に一人座っていた僕に、片桐さんが話しかけてきた。僕たちの年齢は思春期というらしく、異性に関心を持ち始めるだの、どうのつてことでこうつ風景は珍めやしたりしない。

「やうかな

原因は姉さんにあるので（仮にも）、適当に答えておいた。

「コイツ、年上の女と会ってるんだぜ、片桐さん」  
友達のユウヤが片桐さんと僕が2人で喋っているのを見たのか、咄嗟に入ってきた。

「えつ、うつそー」

片桐さんは驚く。

「嘘に決まってるよ」

ユウヤには姉さんの存在を言つていないので、嘘なのは確かだ。ユ  
ウヤに限らず、姉さんの存在は誰にも話していない。

「ふうん、やうなんだ」

そう言って、片桐さんは行ってしまった。

残されたユウヤと僕は、冒休み下ネタで大いに盛り上がった。

家に帰る途中、加織の後ろ姿が見えた。

距離はかなりあって、ゴマ粒のようにしか見えない。僕は目が良いコトだけが取り柄である。

このまま追いかけるのも面倒だし、何より気まずかった。

だけど、そのまま行けば「やれるかも」という卑猥なことを脳裏で過った。

姉さんが家にいる可能性の方が高いし、昨日後悔したばかりなのに、僕はおかしいのだろうか。

言い訳をすると、sexが上手くなつて姉さんを楽しませたかつた。それには相手・パートナーが必要だ。AVを見るより、実践する方が上達するということは何よりの

明白だ。その相手が姉さんでも良いのだが、僕が少しでも早く姉さんに「最高」と思つてほしかつた。

一番好きな人にはそう思つてもらいたい。

姉さんは今の、僕のやり方で満足してしまつていて。僕も満足している。それでいいじゃないか…、いや、でも、欲を言つなんらもつと上を狙いたい。

僕はまだ幼い男子にすぎない。

僕は走つた。

加織がどんどん近付いていく。一本道ほど走るのに向いている道はない。

その瞬間、思いもしない光景が広がつた。

加織に追いつこうと走ったのは良いが、加織の横には僕より背の高い男が居た。

無事に気付かれていなかつたから、僕は何にもないふりをして2人を通り越した。

加織はどんな表情をしていただろうか。  
僕にはそれは見えなかつた。

家に帰ると、姉さんが居た。

今まで考えられない幸せだつた。

こんなにも愛しいのに、遠ざかっていた時期があつたのだから。

「おかえり」

姉さんが玄関先で迎えてくれた。

「ただいま」

僕は笑つてかえした。

幸せは、長く続かなかつた。

僕と姉さんはまつたりTVを見て過ごしていた。

本当は良い雰囲気を作りたがったのが本音だ。

しかし、姉さんは笑ってTVを楽しんでいるので、難しそうだ。

想い悩んでいると、ケータイが鳴った。  
加織からだった。

『ごめん。あの人は違うから』  
との内容だった。

僕は忘れかけていた記憶を引っ張り出し、『別に良いよ』と返信した。  
しまった、と思ったのは姉さんの顔を見てからだった。  
「良いよ」ではなく「いいよ」にしておくべきだったと少し後悔した。

その夜、加織から返信は来なかつた。

同じく、その夜は姉さんと何事もなかつた。

僕と姉さんのお別れが近づいているだなんて、思いもしなかつた。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n7322x/>

---

姉サンに発情中part2

2012年1月14日21時54分発行